
夜明け前より瑠璃色な
Moonlight Cradle
オーガストオフィシャルハンドブック
2009年夏号
FORTUNE ARTERIAL
― フォーチュン アテリアル ―
AUGUST
OHB-090814

PREFACE－まえがき

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。
何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

この小冊子が配布される夏コミでは、アンケート葉書などでたくさんご要望を頂いていたMCのサントラ『Future Passport』を発売することができました。特にボーカル曲「Marginality」は、シンシアルートの印象深いところで使用したこともあって、特に多くのお声を頂いていました。全曲リマスターして高音質になっておりますので、お聴き頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみいただければと思います。

2009年夏　オーガスト／ARIA 拝

CONTENTS



FORTUNE ARTERIAL
－フォーチュン アテリアル－

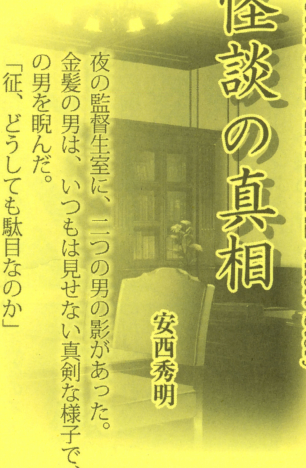

満弦ケ崎
花火大会
花火大会……ですか？
はい、今日の仕事が終わったら二人で行きませんか？
ええ、そうしましょう
花火に行こう！
べっかんこう
満弦ケ崎の花火大会は凄いから絶対驚くと思いますよ
どうでしょう？私はそう簡単にはびっくりしませんよ
何にせよ、今夜になればハッキリすることですけど
それでは遅れないように仕事を頑張らないといけませんね
はいっ


ドーン
ドーン
……
……仕事、明日にしますか？
あ……
ダメです
遊ぶために予定を遅らせるわけにはいきません


ふう、これで最後ですね
お疲れ様でした
……会場まではどれくらいかかるのですか？
30分位ですね
では……今から行っても、
しゅん
終わってしまいますね
私なら大丈夫ですから
また来年行きましょう。楽しみが増えました
……
どこかにないか……？
……礼拝堂の近くで……見晴らしの良い場所
ぽくぽくぽくぽくぽくぽくぽくぽ
チーン
ダッ
た、達哉っどうしたのですか!?
居住区の端です！あそこなら！


ドドーン
わぁ
ぎゅっ
ドーン
達哉……
エステルさん……
たーまやー
えっ?
かーぎやー
たまやー!
おわり





FORTUNE ARTERIAL Short Story

怪談の真相

安西秀明

夜の監督生室に、二つの男の影があった。
金髪の男は、いつもは見せない真剣な様子で、長髪の男を睨んだ。
「征、どうしても駄目なのか」
「ああ」
「サンプルまで作ったんだぞ」
「捨てろ」
「もったいないだろ」
「事前に相談しないお前が悪い」
「捨てるのか……」
その時、金髪の男は、ひらめいた。
別の使い方をすればいいじゃないか、と。

◆

「幽霊が出たんですって」
放課後の監督生室に、澄んだ声が響いた。
俺は文化祭予算の書類のチェックを止めて、声の主を見た。
副会長は、目安箱に入っていた紙を疑わしげな目で見ている。
「幽霊？」
「支倉くんは、幽霊はいると思う？」
「信じてないな」
「吸血鬼は目の前にいるけど？」
いたずらっぽい目で俺を見ている。
ふわふわとしたウェーブの髪が揺れていた。
……幽霊も副会長ほど可愛いのなら、会ってみてもいいが。
「吸血鬼は見たから信じる。幽霊は見てないから信じない。それだけだよ」
「わかりやすいわね」
「副会長はどうなんだ？」
「私は、吸血鬼しか信じてないわ」
勝ち気な瞳で言い切る。
幽霊なんてまったく怖れていないようだ。
「で、どうするんだ？」
「え？」
「その紙、生徒会への依頼なんだろ？　『幽霊が出たのでなんとかしてください』とか」
「被害も書いてないし、どうも胡散臭いのよね」
「なるほど」
今は、文化祭を控えた忙しい時期だ。
悪戯にかまけている時間はないが。
「ちなみに、場所はどこなんだ？」
「ここの一階よ。体育用具を取りに来た時、見たんですって」
「一階の倉庫に幽霊か……」
がちゃり。
ゆっくりと扉が開いた。
白い髪の少女が、震えていた。
「どうしたんだ、白ちゃん？」
「……実は、わたしも見たんです」
「え？」
俺たちは、顔を見合わせた。

◆

監督生棟の一階は倉庫になっている。
扉を開けると、生徒会の資料やら、体育祭の大玉やら色々な物が詰め込まれていた。
白ちゃんの話によると、この一番奥で何かが自分を見ているような気がしたのだという。
その時は、怖くてすぐに帰ってきたそうだ。
「……ここ、明かりつかないのよね」
「電灯を換えるべきだな」
「換えたけど、つかないのよ」

「ふむ」

どこかで配線自体が切れてしまっているのだろう。

「行くわよ」

副会長は、薄暗い部屋に足を進めていく。

俺はその後ろから入っていった。

普通は男が先を歩くよな……。

普通、ね。

彼女は普通じゃないのだ。

「この明るさでも見えるのか？」

「多少はね」

副会長はれっきとした吸血鬼だ。

普通の女の子が、怖がって男に抱きついたりするシチュエーションでも、副会長には関係ない。

憧れはするが、期待しても無駄だろう。

「はあ……」

「なんのため息なわけ？」

「いや、別に」

「それにしても、相変わらずっ、歩きっ、にくいわねっ」

大量の資料に足が埋もれそうになる。

副会長が足を上げるたびに、スカートがひらひらと持ち上がった。

うん、男が後ろを歩くのも悪くない。

「支倉くん」

スカートの揺れが止まった。

「どこを見ているのかしら？」

「転ばないように足もとを」

「それから？」

「副会長の足を」

素直に言った。

「あ、あのね、一応生徒会の仕事なんだから、真面目にやってよね」

「すまん」

俺が謝ると、副会長は赤くなった顔をぷいと逸らした。

さっきよりも足が低く上がるようになる。

ここまで来ると、かなり暗い。

副会長が歩みを止めた。

「白ちゃんが言ってたのは、この棚の奥よね？」

「ああ」

俺が答えた後、沈黙が部屋を支配した。

副会長は、じっと棚を見つめている。

「……どうしたんだ？」

「別に」

そう言ったまま、動こうとしない。

様子がおかしい。

「もしかして、怖いのか？」

「まさか。私は吸血鬼よ。怖いはずがないじゃない」

そうだよな。

「ただ、噂っていうのは学院生活を楽しくする場合もあるから、噂を消すのが正しいのかどうか自問自答をしていただけよ！」

びしっと俺に人差し指を突きつけた。

指先が、ぷるぷると震えていた。

怖いのかよ。

……なんだかんだ言って、年頃の女の子なんだな。

ちょっと可愛いと思ってしまった。

「なんで笑うのよ」

「なんでもない」

顔に出てしまったらしい。

「俺が見ようか」

「大丈夫よ」

意地っ張りめ。

副会長は、手で俺を制して棚の奥をのぞき込んだ。

「ひあっ！？」

「うあっ！？」

瞬間、何が起こったか理解出来なかった。

俺の胸部を衝撃が襲い、締め付けられる。

ぎりぎりぎり。

何かが絡まっていて、動けない。

これが、

これが噂のポルターガイストか！？

ポルターガイストだっけ？

とにかく、締め上げられている！

「……あれ？」

なんだか人肌に温かくて心地よい。

恐る恐る顔を下に向けた。

ふわふわとした髪と、リボンらしきものが鼻先にある。

やたらと甘い香りがする。

つまり、俺は副会長に抱きつかれていた。

「な、なにやってんだ、副会長」

「いたの……」

小さく震える声。

まさか、幽霊が？

俺は、そんなもの信じていない。

それでも、背筋に冷たいものが走った。

俺はゆっくりと、棚の奥をのぞき込むように顔の位置を変えた。

そこには——

暗闇の中、空中に浮遊した女の子がこちらを見つめていた。

見間違いだろう。

じっと目を凝らす。

いつの間にか、自分が呼吸を止めていることに気がついた。

緊張で、体が強ばる。

やがて、暗闇の中から白く浮き上がった表情が、はっきりと見えてきた。

ふわふわの髪、勝ち気な瞳。

副会長にそっくりだ。

これは——

「……なんだ、鏡か」

一気に緊張が解けた。

鏡の角度のせいで、浮いているように見えているのだろう。

「そんなはず、ないわ」

副会長が、震える声で言った。

「ちらりとしか見てないけど、鏡なんかじゃないわ」

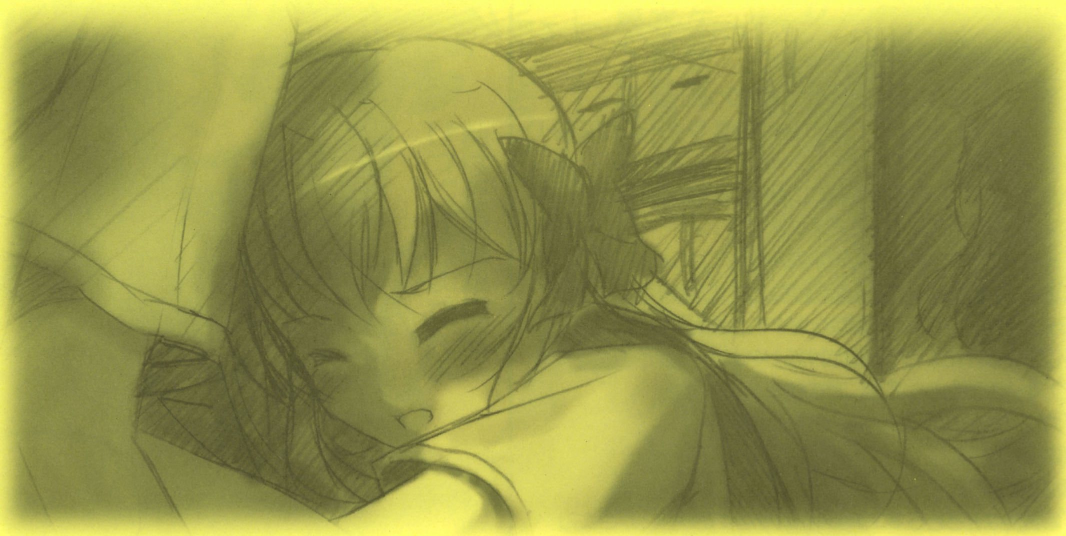
そう言われて、俺は気がついた。

鏡なはずがない。

だって副会長は今、それに背を向けて、俺にしがみついているじゃないか。
刹那、何かの感情が弾けた。
副会長を抱え、全力で走った。

◆

「ああ、それ俺がつくった瑛里華の等身大抱き枕」
「はああ!?」
俺と副会長は、呆然とした。
必死で二階に戻ってきた俺たちは、いつの間にか来ていた会長に顛末を話したのだが。
「抱き枕？」
「文化祭で生徒に売る気だったんだけど、征に怒られてね」
「当たり前でしょ!?」
「採算が合わないって」
「重要なのはそこじゃないから!!」
「売れると思ったんだけどな……」
「まったく、余計なことばっかりするんだから」
「わたしの見間違いだったんですね、すみませんでした」
白ちゃんが申し訳なさそうに頭を下げた。
「いやいや、俺だって勘違いしたわけだし。ともかく幽霊じゃなくてよかった」
「人騒がせにも程があるわよ」
副会長は、ご機嫌ななめの様子で、自分の席に戻っていく。
俺は会長に向き直った。
「もうちょっと置き場所考えてくださいよ。あんなところに抱き枕を吊したら、誰だって怖がるに決まってるじゃないですか」
「だって、それが狙いだし」
「はあ!?」
確信犯かよ。
確信犯……？
「まさか、あの投書も会長の仕業ですか」



「正解。よくわかったね」
やっぱりか。
全ては会長が仕組んだことだったのだ。
「……で、どうだったんだい？」
会長が俺に耳打ちしてくる。
「何がですか」
「瑛里華と二人きり、暗闇でドキドキ肝試し大会」
「別に、どうもしないですよ」
「クールだね。さっきは鬼のような形相で、瑛里華をお姫様だっこして飛び込んで来たくせに」
「……」
思い出すだけで恥ずかしい。
会長の『お姫様だっこ』が聞こえたのか、副会長がこちらを見ていた。
目が合う。
なによ、とでも言いたげだ。
少し頬が赤く染まっている。
「うん、何より何より」
会長は、俺たちの顔を見て満足げに頷いた。
「いったい何がしたいんですか」
「俺はただ、二人が仲良くなればいいなぁ、と思ってるだけさ」
「余計なお世話です」
「はっはっは」
満足げに笑いながら席に戻っていった。
「まったく……」
白ちゃんの出してくれたお茶を飲みながら、仕事に取りかかる。
俺は、会長の言葉を冗談だと思っていた。
会長が、どうして俺たちをくっつけようとしていたのか。
俺がその理由を知るのは、もっと後のことだった。

END

スタッフ対談 第23回 べっかんこう & 榊原拓



榊原拓(以下榊):さてさて、今回のコミケでは『MC』のサントラが発売となりました。
べっかんこう(以下べ):そうですね。ジャケットはいつも通り描き下ろしですよ。
榊:書き下ろしというか録り下ろしというか、新曲もありますので、どうぞよろしくお願いします。
べ:ところで、サントラのジャケ絵ではいつもヒロインがヘッドホンをしているんです。
榊:ほほう。これまでは麻衣と翠、今回はシンシアでしたっけ?
べ:実は、はにはにやFAでもヘッドホンだったり。
榊:あ、確かに。お持ちでしたら見比べてみるのも楽しそうです。
べ:それでは一番ユーザーの皆様が気になっている情報であろう、新作について……。
榊:残念ながら、今回の夏コミで発表! とはいきませんでした。
べ:楽しみにしていて下さった方も多いと思います。すみません。
榊:どこのパートが遅れているってわけでもないですよね。
べ:色々進んではいるんですが。言えないのはもどかしいです。
榊:タイミング的にはまだ、というプロデューサー判断ということでご理解いただければと。
べ:では、アンケート葉書からいくつかご意見をピックアップしてみる企画をやってみましょう。
榊:「髪を下ろした麻衣とのHシーンが見たかった」
べ:そうですねー。髪型だけでなく衣装や時間、ライティングの割り振りも毎回悩みどころです。
榊:悩みまくりです。全ての皆様のご期待に応えるのは難しいですが、なるべく頑張っていきたいと思います。
べ:「過去の抱き枕・ぬいぐるみの再販売をしてほしい」
榊:布ものは数が少ないと単価が跳ね上がってしまうのが辛いです。あと、イベントで商品の種類を増やすと販売速度が落ちてしまうジレンマも。かといって通販だけだとやはり数量が……うぐぐ。
べ:コスト的に厳しいって感じですかね。
榊:「カレンさんのルートが無くて残念すぎる」
べ:僕も残念です。
榊:私も残念です。
べ:「解像度はそろそろ800×600じゃなくてもいいのでは?」
榊:システム担当の人によると高解像度にすると結構重くなるみたいです。エフェクトとか。
べ:ワイド対応はそろそろ検討したいですよね。
榊:先のことは分かりませんが、今回のアンケート葉書の解像度の欄の集計も踏まえて、いろいろ考えていきたいと思ってます。
べ:16:9だとイベントCGの描き方が変わるので原画的にも色々考えないとなぁ。
榊:「ロゴクリックのアレにボイスをつけて欲しい」
べ:あれって、マスターアップぎりぎりに作ってますからね。
榊:ですね。収録はもう一ヶ月以上前に終わってしまってます。
べ:スタッフの遊び心なので、ご理解頂ければと思います。
榊:「菜月は俺の嫁」
べ:ヒロイン達はプレイヤーの皆さん一人ひとりの心の中に……みたいな?
榊:あー、「いやいや、俺の嫁ですよ」とか言うのかと思った(笑)。きれいにまとめましたね。

2009.7.2 21:30 社内にて

POSTSCRIPT－あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

さて、開発室では次回作の制作が進んでいます。
進んでいますが……残念ながら、まだまだユーザーの皆様にお見せできる段階には達していません。一作ごとにより良い作品となるよう作り込んでいるのですが、そうするとどうしてもリリース間隔が延びてしまいます。大変お待たせしておりますが、新作情報としてお知らせできるようになるまでもう少々お待ち頂ければと思います。

『FORTUNE ARTERIAL』も、キャラクターソングやWebラジオをはじめとした展開が徐々に始まっています。先には更なる展開があるかも知れません。こちらも続報をお待ち下さい。

それでは、今回はこの辺で。
今後とも、オーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2009年夏　オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年夏号

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

http://august-soft.com/
http://aria-soft.com/



FORTUNE ARTERIAL
—フォーチュン アテリアル—
夜明け前より瑠璃色な
Moonlight Cradle



夜明け前より瑠璃色な

Moonlight Cradle

FORTUNE ARTERIAL

―フォーチュン アテリアル―

オーガストオフィシャルハンドブック

2009年夏号

AUGUST

OHB-090814